

〔講演録〕

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ Bonaventura RUPPERTI (ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学 アジア・地中海アフリカ研究学科日本語日本演劇教授)。

一九七八―八三年 ヴェネツィア大学東洋学科専攻。一九八三年―八六年 早稲田大学大学院芸術専攻演劇研究科に留学。一九八八―一九九二年 ナポリ東洋大学・ヴェネツィア大学共同の大学院東洋学博士号。二〇〇四―二〇〇五年 国文学研究資料館客員教授。二〇一五―二〇一六年 国際日本文化研究センター外国人研究員共同研究『日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体』主催。専門は日本近世演劇および日本近世・近代文学。編著書多数。二〇一七年六月二十九日 外務大臣表彰。二〇二〇年四月二十九日 旭日中綬章。ここに掲載するのは、二〇二二年六月二十六日、日本演劇学会全国大会(名城大学、オンライン)における基調講演を記録したものである(編集委員会)

『コロナの時代の舞台芸術—— 臨界を越えるイタリア』

E quindi uscimmo a riveder le stelle.

「そして我らは、星を再び仰ぎ見ようとして外に出た。」

(ダンテ『神曲』地獄編の最後のフレーズ)

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ

おはようございます。温かいご紹介いただきましたきましたヴェネツィア大学のルベルティと申します。この度、日本演劇学会の全国大会で基調講演をさせていただきます、本当に身に余る名

誉に存じます。日本演劇学会の永田靖会長、役員の皆様にご挨拶を述べたいと思っております。また、岩井眞實先生を初め、名城大学の皆様にもお礼を申し上げたく存じます。

私は日本演劇の専門ですが、ここではイタリアの舞台芸術についてお話できること、大変嬉しく思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、パワーポイントを共有させていただきます。

『コロナの時代の舞台芸術——臨界を越えるイタリア』

Et quindi uscimmo a riveder le stelle.

「そして我らは、星を再び仰ぎ見ようとして外に出た。」

二〇二一年はダンテ・アリギエーリ没七〇〇年に当たります。『神曲』は、古代ローマの詩人ウエルギリウスとともに、「地獄、煉獄、天国を旅する三遍で構成されている叙事詩、世界に知られた不朽の傑作・大古典でありますけれども、ダンテとウエルギリウスが地獄を出た時の言葉」そして我らは、星を再び仰ぎ見ようとして外に出た。」は、イタリアでは新型コロナウイルスの真つ只中にあるイタリアの再生を望むフリーズにもなりました。星は花形という意味もあるので、去年はスカラ座も伝統的に劇場のオペラ・シーズンの始まりとなっている一二月七日（ミラノの守護聖人、聖アンブロジウスの記念日）になりますけれども、「A riveder le stelle」という方も計画しました。

さて、地獄のカレンダーになりますけれども、二〇二〇年、このような日程ですね。三月から五月の間、劇場、映画館、コンサートホールなどはすべて閉鎖されましたので大変な状態だったんですけども、第一波になり、そして六月辺りからコロナウイルスとの共存の時期になって、一〇月から徐々にまた厳しくなる第二波が始まって、そして一月からずっと劇場はまた閉まってしまっ、第三波になりますけれども、徐々に下火になってワクチン接種キャンペーンが進むにつれて、ようやく今年の四月二六日から解除となりました。

このような、私は「地獄から煉獄への道」だという風になりました。演劇人、俳優、演出家、劇作家、音楽家だけではなくて、皆にとつて反省と勉強、研究と実験の期間、そういう時代となりました。

独裁者の多い世の中、政治家と国民の関係はどういうものか、考えさせられました。そして政治の力と化学の力を確かめる上でとても勉強になる時期だったと、そう思います。どちらも国民のために働くんですけど、誰があてになるか、痛感させられました。

そしてこのように、ほとんどロックダウンを繰り返しながら、パンデミックのような状況の波に合わせながら、イタリ

アにおける舞台芸術の（演劇）活動も、緊急事態の中でなんとか苦しみながら戦ってきました。そして『神曲』のダンテの気持ちで、星が見える空を望みながら、興行・演劇が再出発しようとしている。

本発表では、苦しんできた産業、文化活動の中で、特に舞台芸術関係の仕事の人々、演劇人、アーティストと裏方はコロナ禍という苦境とどのように向き合ったか、そして距離を守り接触を避けることを余儀なくされた世の中でどのように生きて、感じて、創作を続けてきたか、作り手と多数の享受者の共存によって、身体でそして生で創造されると同時に享受される舞台芸術は、どのように変化してきたかということ、この臨界を越えてどのように変化していくか、ということについて考えたいと思います。

新しく生まれ変わるには、地獄を旅しなければなりません。今までの生活は当たり前のように見えましたけれども、そうではありません。平和の中でも、価値観を考える必要があります。平和の中でも、本当に大事なものは何か、アーティストにとっても、観客にとっても、もちろんその業界の人々にとっても、反省と勉強の時ですけども、閉じ込められた長い期間の間、自分の仕事、ロックダウンの間の仕事、

これからの仕事を考える、大変苦しい時期だったんですが、これからの世の中はどうなるか、という不安を抱えながら十分に考える時間がありました。

家に残りながらも、旅をする芸術はどれほど大事か、芸術の言語は人間のためにどれほどためになるか、ということを考えさせられました。限界を乗り越えるのは芸術であり、想像力があります。今回の体験はそういう風に感じさせられました。

言葉も行動も目に見えるようにするのは芸術であり、芸術の世界だけは限りと限界のない世界です。画像と音響と体験、その実際の存在とはどういうものか、そして隔離されても、距離を守りながら、技術と想像力に頼るしかなかったわけですが、パンデミックにより自由と服従、自分と他人に対する責任、連帯の危機をどう考え直すかということも考えて、距離と隔離（自宅待機）など、社会と個人、個人と個人の関係、身内との距離、個人の悲しみと社会・共同体の悲しみ、そのようなテーマが明らかに生々しくも浮かんできました。孤独死とメディアによるその公開というテーマも。

何世紀もかけて、死というものを、できる限り、喪失の悲しみを宥めるために、葬式、儀式などでいろいろな準備と手

続きと葬儀などで現実を受け止めることになっていきます。

「あらぬ別れ」を、手を繋いで、抱き合って、体でもお互いに心を通わせるなどでなんとか乗り越えてきましたが、いきなりお見舞いもできない、全て携帯電話などでしか連絡ができない、挨拶もできないまま、別れるという悲惨、すぐ火葬となり、身内のところに戻らないで、直接お墓へという恐ろしい、情けない状態になってしまいました。

共に見る儀式、行事、催し物の重要性も浮かんできましたけれども、お葬式も他の儀礼と共に、一つの行事で、とても大事な儀式・祭儀です。お葬式ができなくてどうなるか、実感、痛感させられました。

共に生きる儀式、儀礼、共に観る出来事、行事などは、どれほど大事か、それも実感いたしました。面倒を見る、慰める、いたわる、優しく接することで相手の苦労を癒し慰める心もどれほど大事か分かりました。一緒に何かを見る、共に感じて笑ったり泣いたりするという行為自体はどれほど大事かという、共存、共生と、演劇という存在は、そういうことも明らかにしてくれるのです。悲しみ、喪失と別れに対して麻酔をかけていた社会ですが、悲しみの精神的な価値も私達は忘れてしまっていたのでは無いでしょうか。虚構でも、舞台芸術は、そのような激しく極端な感情の領域、悲しみも

繰り返して体験させてくれる世界です。

緊急事態の例外的なパンデミックの状態を認め、ロックダウンを受け入れていく中で、悲しみが我々の幸福を支えていることを私達は忘れていたのではないのでしょうか。一緒に感動する時、そしてつながりを再考する時が来たのではないのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症に対してのみならず、看病の問題、貧困の問題、経済的な問題、生活の問題に対してもボランティア活動は大変重要な役割を果たした。なくてはならないものになったのです。国だけではなく、団体と一人一人の努力と責任がどれほど大事か。

ヴェネツィア共和国（おそらく近代の最古の共和国、伝説によると、今年には建国一六〇〇周年になるのですが）はもうなくなつてイタリアの一部になりましたけれども、昔のことわざには「疫病を乗り越えるには、一つのクリスマスと二つの復活祭が必要だ」と言われていましたが、その通りのようです。

イタリアは、一二万五千人以上の死者となりました。ロンバルディア州の地方は、お爺さんの世代をほとんど亡くしてしまいました。ここ数年の例年の平均の死亡者の数を統計で調べて見ると、明らかにコロナ禍による死亡者の人数がわか

るようになります。国によって、死因をどのように認めるかによって数え方は色々ありますけど、イタリアの場合は、この数年の例年より二〇二〇年の死者は一〇万人以上増えていることが明らかにわかりました。

もちろん、日本中の医師や看護師などの医療スタッフが最前線で闘っていますけれども、イタリアではすでに一年半の戦いでした。医者も三三六六人亡くなりました。そのうち、六五人すでに定年退職していて、ボランティアとして仕事に戻って、立派な仕事をしてくれました。密集すればするほど、感染も病気も重くなり、死亡率も上がるといふ事実が明らかになりましたけれども、集中治療室の中でも、外でも、医師でさえ、あのような防護具をしても、常に眼・鼻・口を覆う個人的な防護具、キャップ、ガウン、手袋などをして感染して、重体になって死んでしまいました。

看護師も八三人の死亡者ですね。その中では、二人は定年になっても皆を助けるために仕事に戻った人もおり、六人自殺してしまいました。

ヒポクラテスの言葉、二四〇〇年ぐらい前の言葉ですけども、このようなことを述べているんですね。「金銭的報酬だけを目的に医療を施したり医学を教えたりすることを戒め、人命を尊重し、患者のための医療を施すこと、患者等の

秘密を守る義務」などについて述べています。まさに、イタリアの医者は、お金、お金だけではなく、国民のために自分の役目はもちろん、医者だけでなく看護師も役目に力尽くして見せてくれました。

共通の関心・目的・基準、共感を認識して、グループや階級の心理的な一体感を創り出す連帯というものはとても大事に見えてきました。人々を一つに結びつける社会として力を合わせて一緒に助け合う、一緒に歌う、一緒に踊る、歌と音楽で励ますという行動がとても大事になってきました。そしてレストランが閉まっていたても、コックさん達が病院の医療従事者に料理を提供すること、そのうち、貧困がひどくなつて、教会などの施設に食事をもらう人たちにお持ち帰りのお弁当を提供するという、生活困窮者への食事の提供がとても大事になってきましたけれども、救急車のボランティアもワークチンキャンペーンのボランティアも多くあり、本当に感動するほど素晴らしかったと思います。

時間を共に過ごしながら、再会を待ちながら、助け合いながら頑張っているということ。動画が見えますか。このように屋上でテニスする二人の女の子は大変有名になりました。

《<https://www.youtube.com/watch?v=kxm8RZi5O4>》

また、このような人も（動画。八一歳のお爺さんは自分の奥さんがコロナウイルスで入院してしまっって、病院の外でアコーディオンでセレナーデを引いたりしてあげました。看護師たちが奥さんを支えてこんな風に窓から見える場面です。

《<https://www.youtube.com/watch?v=XHvFWEHfAw>》

さて、二〇二〇年の春の一番印象に残ったスペクタクル（イベント）といえば、ローマ教法フランシスコの祈りと復活祭の儀式でした。教皇フランシスコが、三月二十七日（金）夕方、バチカンでパンデミックの収束を祈った典礼ですが、雨の降りしきる中、誰もいない聖ピエトロ寺院の広場を渡り、お祈りする場面はとても強く印象に残りました。舞台芸術を弾圧の対象にした時代も度々あったカトリック教会ですが、演劇の様式も取り入れ、スペクタクルに対しての優れた美的な感覚の伝統があります。

《<https://www.youtube.com/watch?v=N5pLQ2G8GK0>》

フランシスコ教皇は、「病気になる地球（自然環境）に私達だけが健康でいられると信じ込んでいましたが、過ちでした。私たちはみな同じ船に乗っている」というような言葉も述べられていましたけれども、「嵐は、わたしたちの弱さを

あばき出し、わたしたちが計画的、習慣的に築き上げた安心は、偽物で表面的なものであったことを明るみに出します。社会や共同体を支え、力を与えていたものを、放棄してしまつたことを悟らせませす。今回のパンデミックを通して私たちが認識させられたのは、苦しむ人々の間には違いも隔たりも無いという事です。」というような言葉だったので。

そしてもう一つの祭儀・スペクタクルとして、印象に残つたのが、一番犠牲者が多かったベルガモのお墓でのコンサートです。この場合も、ドニゼッティ (Gaetano Donizetti) によつて、ベルリーニ (Vincenzo Bellini) が三八歳の若さで亡くなつてしまつたときに作曲されたレクイエムですね。ぜひ見て聞いていただきたいと思います。

《https://www.youtube.com/watch?v=gS_eY8tVOio》

これは、二〇二〇年の春、ロックダウンが緩和になつてからの初めてのコンサートで、お墓の前ですね。皆、野外にオーケストラが集まつて並んでいるんですけども、合唱団は皆必ずマスクして、このような光景です。これは犠牲者が一番多かつたベルガモの街ですね。そしてコンサートが始まりましたけれども、イタリアの大統領の参加もありましたけれども、そのうち夜遅くなつて…。主役の四人の歌手は皆この地方で生まれた、とても有名なオペラ歌手です。これはイタリ

アの大統領です。

レクイエムです。死者の安息を神に願うカトリック教会のミサですが、「葬送曲」「死を悼む」という意味もあります。日本語で言えば「鎮魂曲」で、このように悲しみ・苦しみ多い一年でありました。

さて、このような現状でしたけれども、これから今日の話、演劇の本題に移りたいと思います。

日本のように、長い歴史と伝統があるイタリアの演劇は、大まかに分けるならば、以下のような分類になる。

- ・ 古代ギリシア、古代ローマの悲劇・喜劇、ルネッサンスの悲劇・喜劇
 - ・ コンメディア・デッラルテから一八世紀ヴェネツィアの劇作家カルロ・ゴルドーニ (Carlo Goldoni, 1707-93) の戯曲へ繋がり、各地方における方言演劇に到る系統
 - ・ オペラの発祥地と主流なるイタリア・オペラ、楽劇
 - ・ バレエ、ダンス
 - ・ 人形劇 (シチリア島のプーピ、ミラノのコッラ劇場などについて)
 - ・ 近・現代演劇から最新の実験について
- 以上のジャンルからいくつか実例を挙げながら、報告したい

と思います。

演劇という定義なんですけれど、古代から現代の先端の舞台芸術の多彩な諸現象を総括する広い定義にしたいと思います。演劇は二つの条件を備えているものとして、まず、言葉・音楽・動き・舞踊などによる総合芸術ということですが、もう一つの条件は、作り手と多数の享受者の共存によって創造されると同時に享受されるという定義に基づいて、今日の舞台芸術について話したいと思います。

イタリアの場合は特に、総合芸術としての流れがメイン、主流になっていると思いますけれども、演劇というものは、実際の舞台で創造されると同時に享受されるものです。主に生で行われる、実際の創造によって行われるものなんです。創造されると同時に享受されると同時に消えていく、一回的な現象であるという特徴を持っています。そして、その儚さこそ、演劇の一つの魅力にもなっているということですが、俳優と観客の葛藤によって成り立っている芸術です。

さて、まずは古代ギリシア・古代ローマ時代のものについてお話したいと思います。イタリアの場合は一九〇以上の

古代ギリシア・古代ローマの野外劇場、とても大事な財産ですけれども、そしてこの状況の中で特に貴重なものに見えてきたわけです。やはり野外劇場のほうがコロナ禍の中で使いやすいもの、活用できるものとして見えてきましたが、これからは、活用できるものとして使えてきましたが、これからは、活用できるものとして使えてきましたが、これからは、活用できるものとして使えてきたが、これからは、活用できるものとして使えてきたが、

イタリアの演劇活動は二通りありますけれども、秋から春まで劇場の中の上演と、春・夏・秋の野外劇場などでの公演、野外で行われるものですが、イタリア人も観光客もヴァカンスを過ごすリゾート地、海、山、避暑地などでの公演、夏の演劇祭などが主役になりますけれども、それは特に観光客相手のものにもなります。

さっと色々見ていきたいと思えます。これは、シラクーサのギリシア悲劇ですね。

<https://www.youtube.com/channel/UCjpmSAHJgX7ar7rprwYFH9w/videos>

この画像は、『オイディプス王』は疫病と関係がある悲劇なんですけれども、是非見てください。

<https://www.youtube.com/watch?v=wjb0m0hbZY>
シラクーサで行われた上演です。野外劇場だと、このよう

なことも出来ずけれども、今現在疫病に荒らされたインドなどの国でも私達が目にするような火葬などの場面なんですけれど、これはパンデミックの前（二〇一三年）に行われた公演です。

シラクーサは古代ギリシア・ローマの戯曲（イタリア国立古代戯曲研究所INDA）とギリシア時代の野外劇場がある町です。コロナウイルスのパンデミックの時代にはほとんど舞台は夏の間しか上演されなかったのですけれども、パンデミックのピーク前も緩和になった今も公演を行ってきました。これだけ広いスペースとなつていますが、一番向こうに青い海が広がるような景色になっています。

シラクーサの古代ギリシアの劇場で行われたもの、もう一つお見せします。

これは『メデア』の舞台ですね。

<https://www.youtube.com/watch?v=d3304PzI7m0>
これはタオルミーナの野外劇場ですね。これもギリシア時代・古代ローマのものです。まあたくさんありますので、

その地方、その地方の人間、民族にとつてどれほど大事なものであったかと言うこと、どれほど貴重なものかということが明らかになると思いますが、これはレッツェ。ほとんど南から北まで遡っていくと、これだけたくさん野外劇場があり

ますね。これは中イタリア。これはローマですね。これは中央イタリア、ヴォルテッラも、フィレンツェあたりにあります。そしてこれは北イタリアです。まあ、有名なヴェローナのアレーナ (Arena di Verona) は、これは古代ローマの競技場ですね。

もう一つのパンデミックのコロナ禍の時代に行われた公演をお見せしたいと思います。これも公演というよりも performative Exhibition といってジェノバの国立劇場が主催したパフォーマンス (タヴィデ・リヴェルモア Davide Livermore 演出) が中心になっている展覧会ですね。

《https://www.youtube.com/watch?v=V0791_mPy0k》

各部屋にものが展示されているわけですけども、これも『オイディプス王』を対象にしたものなんですけれども、そこに悲劇『オイディプス王』の朗読の声も聞こえながら、展示されたインスタレーションも、生のパフォーマンスなども見たりして、オンラインでも観劇できる、体験できる展覧会になっています。『オイディプス王』のイタリア語訳ですが、このようにすべての部屋は一つの場面になっていますので、ソフォクレスの悲劇の全体のストーリーを全て視聴覚的に観劇できるようにしています。

ルネッサンス時代のイタリアの中で、宮廷文化が栄えて、いろんな街に宮殿と新しい劇場空間が生まれるわけですが、それもおかげさまで、イタリアの建築、建造物として残っているわけです。ルネッサンスに古代ギリシア・ローマ時代の演劇の再発見が行われ、古代ギリシア・ローマ悲劇・喜劇の復興ということになりますけれども、こういう一五八五年建設のオリンピコ劇場、私の住んでいる町にある劇場も、ほかの室内劇場もルネッサンス時代の町々に生まれてきます。これも一応コロナ禍の時代の中でも多少使えたわけですが、観客は入れない状態だったので、本格的な公演と言えないようなものです。

悲劇と喜劇のほかにも牧歌劇も生まれて、そしてオペラが生まれるんですけども、オペラはアリストテレスの『詩学』の翻訳を通してギリシア悲劇には音楽があつたということがわかって、音楽を伴ったギリシア悲劇の夢を復活させようということ、オペラという音楽劇というものも生まれるわけですが、その後、オペラの有名な作曲家がでてきます。モンテヴェルディはマントヴァの宮廷から、ヴェネツィアへ移動しますが、それからヴェネツィアでも沢山の作曲家が登場してくるわけですが、演者・歌手・俳優の役割、そしてその中で分業化も増していくわけです。脚本家／劇詩人、作曲家と

音楽家、そして俳優と演出家、そして劇場建築や舞台美術家も見事に発達します。ヴェネツィアの最初のオペラ劇場はサン・カッシアーノ劇場(Teatro di S. Cassiano)が一六三七年創立になっていますが、今、イギリスの大変素晴らしい人が復活させようという事でかなりの予算を集めて活動を行っているわけです。実現できるようにしたら大変嬉しいことです。今は残念ながら残っていないオペラ劇場の一つですね。

そして同じヴェネツィアの中で二〇何軒のオペラ劇場もありましたけども、現在のイタリアの場合、大きな街には全部で六五軒以上の大きなオペラ劇場があります。これらも一応コロナ禍の時代の中でも閉鎖になったんですが、その後、緩和になってからいろいろ公演ができるようになりました。まあ、メトロポリタン劇場は二〇二〇年にオーケストラ全員をすぐ首にしてしまって邪険な行動をとりましたけれども、イタリアの国はそうではなくて、例年通りの予算を出してできるだけ活動が続くようにしました。

オペラ劇場はたくさんありますけれども、二〇二〇年の春に閉鎖して、オンラインに多数の過去のプロダクション(公演)を全世界の人々に無料で提供してから、二〇二〇年の夏に少しづつ工夫して上演ができるようになりました。

例えば、ローマのオペラ座が久しぶりに公演を用意しまし

たけれども、オペラ劇場の中ではなくて、野外のチルコ・マツシモという古代ローマの競技場の中で上演をしました。これはダミアノ・ミキエレット(Damiano Michietto)という人の若手の舞台監督・演出家ですけれども、とても革新的な、自由奔放の、スキヤンダルも起こすような演出を目論んでいる人です。

大統領も参加して、皆マスクして、ご覧になるように、野外劇場で、いろんな政治家の代表がいて、ジャーナリストもいて、オペラシーズンの再開の一つの大イベントになりましたけれども、最初は国歌が演奏されて、そして舞台はこういう形になります。

《<https://www.youtube.com/watch?v=U7fGQmda7wQ>》
《https://www.youtube.com/watch?v=5T_cKmMJ1A》

大きなスクリーンがあつて、舞台はととても広いですが、現代風の設定のヴェルディ作曲『リゴレット』ですけれども、観客はスクリーンの方も見られるし、舞台の方も見られる、それができるように、こういう風にカメラマンが歌手についていき、近くでも撮れるようになっていて、そのスクリーンには現在進行形のカメラマンの撮った動画と、そして前もって準備した過去の場面なども合わせて、三拍子揃ったような上演の仕方だったので。

これはリゴレットですね。そしてスクリーンに映る姿も視えるんですね。これは宮廷人。ヤクザのボスとその仲間のよ
うな設定になっています。これはリゴレットが花をばらまく
場面ですね。

もう一つの場面を是非見ていただきたいと思います。この
人、リゴレットの娘役、イタリアの有名なソプラノ歌手です。
《<https://www.youtube.com/watch?v=qgT6IDL1ZX0>》

このカメラマンはずっと歌手たちについていき、近くから
の撮影もできるようになって、そして前に楽屋で撮った動画
も大きなスクリーンに映ります。ドイツの舞台監督が考える
ような現代風の嫌な演出ではなく、とても爽やかな感じの上
演の演出だったんですね。大きなスクリーンを通して、遠く
の人も、こういう広い場所の中でも十分に楽しめるように
なっていました。いつもこういう風に生演奏と目の前の舞台
での映像と同時に、ダイナミックに移りゆくスクリーンの映
像をカメラが動きながら作っていくのですね。

もう一つのやり方、紹介したいと思います。これは、スポ
レートのパエル・ルイージ・ピッツィ演出のモンテヴェル
ディ作曲『オルフェオ』なんですが、この場合も野外で教会
の前で、スポレートという中世の美しい町は、二つの世界の
演劇祭 (Festival dei due mondi) の中心になっています。この

ような上演の仕方ですね。歌手は教会の前、ピエルルー
ジ・ピッツィはヴェネツィア生まれのかかなりの年配（九一歳
の洗練された、洒落た演出する人です。この人ですね。

《<https://www.youtube.com/watch?v=GBS-FHJKdc>》

もう一つ、フィレンツェで行われた同じピエルルージ・
ピッツィによるヘンデル作曲の『リナルド』の公演です。こ
の場合はオペラ劇場での過去の古い演出だったんですけれど
も、このようなコロナ禍の時代にも最適な演出の様式です
ね。久しぶりに復活されました。『エルサレム解放』という
タッソの原作、美文の叙事詩に基づいたオペラで、ピッツィ
の演出では主人公、騎士たちはこういう風に大きな馬に乗っ
て、船に乗って、動かされるわけですが、ですからほとんど
歌手と歌手の間はかなりの距離を守ることになっており、と
ても素敵で有名な演出だったんですけれども、今回も採用さ
れた演出です。人物が一人ひとり船が馬車かいろいろなもの
に乗っていて、距離は守られるので、カッコよく、美しく、
とても安心できるような原作と音楽に適したバロックのダイ
ナミックで流動的な演出だったんですね。

《<https://www.youtube.com/watch?v=q4mzv6jTVBg>》

もう一つ見せたいと思います。また違う演出の可能性です
ね。スクリーンを使ったヘンデルの『アーチとガラテアとポ

リフェーモ』(Art. Galatea e Polifemo)というオペラ(イタリア語で書かれたセレナーデ)、これ全部インターネットで見られる劇場での公演になっています。このような二つのスクリーンを使って、そこに映される映像の前で、三人だけの人物なので、このような時代でも十分に舞台上で生かされるような作品です。歌手は三人とも大変素晴らしかったので、そしてこのピアチェンツァの劇場ですけれども、観客に無料で、その後インターネットに載せて誰でも見られるように、楽しめるようにしましたので、とても嬉しいことです。

《<https://www.youtube.com/watch?v=8fsU2gp1dg&t=5s>》

これは、今度また違う演出ですね。やはりコロナ禍の時代に一番苦しんだ町ベルガモの劇場です。ベルガモは作曲家ドニゼッティの生まれた町なので、毎年ドニゼッティの音楽祭が開催されますが、この場合は無観客で、こういう劇場の中で鉄棒と鋼板で組み立てた構造になって迷路のような階段になっっているため、人物たちはどうしても動いても上がったり降りたりしますが、出会うことはなくて、人形のように操られているような設定になっています。このような場合も大体三人の主人公、まあオペラの場合はいつも三・四人の主な人物の葛藤が多いですけども、この場合も歌手はとても良

かった。ここに指揮者が見えますね。本舞台にはこれだけの構造ができているわけですが、人物はどうしてももうひとり的人物とまた違う階段を上がったり降りたりするようになっています。ドニゼッティの『マリン・ファリエーロ』です。

《https://www.youtube.com/watch?v=r7h14_1ecmw》

そして、マチェラータの場合は「白い勇氣」と謳い文句で、皆マスクをつけた観客の前にモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』Don Giovanniの野外の公演があったのですけれど、これもローマのオペラ座で二月に行われた公演と、また違うやり方です。ロッシーニ作曲の『セビリアの理髪師』です。

この場合は映画監督マリオ・マルトーネ (Mario Martone)による映画の作りですが、全部ローマのオペラ座の劇場での撮影です。ですから歌手たちはこの劇場の中で楽屋、舞台、客席などを移動しながら、メタシアターのように化粧、衣装付け、準備などを進行中に見せながら、物語を映画のように、観客はもちろん見せませんが、作っていく形です。また劇場の中に、このような糸が張ってあって、プロットも進むに連れて展開していくのですが、最後に糸が全部筋のように解けてしまうよう締め括りになりました。オーケストラは真ん中であってこういう空間の使い方です。映画のような

制作ですが、オペラ劇場が持っている魅力、オペラ劇場を聖なる空間のように最高に活かすというところに成功して良い出来だったと思います。その後同じ形で、『ラ・トラヴィアータ』（椿姫）もローマオペラ座で制作されました。

《<https://www.youtube.com/watch?v=26IXsHlAKU>》

さて、こちらはヴェローナのアレーナです。ヴェローナのアレーナの場合は、今まで大掛かりな演出、大道具がとても圧倒させるような大規模で有名だったんです。そして観客もたくさん入れるような状況なんです。新型コロナウイルスの制限で、二〇万人からどうしても六〇〇〇人だけの観客になってしまって、オーケストラはもちろんオルケストラボックスに戻って、歌手などの演技は本舞台になっているという状況ですが、大掛かりな巨大な舞台設定を諦めて、演者と多数の裏方を使えないという条件に合わせざるを得なかったのです。大道具を組み立てるにはかなりの人数が必要だったのです。それを縮小して、やはりヴァーチャルの世界に頼るしかなかったようです。このように大道具ではなく、ビデオ・デザインによる巨大なレッドスクリーンを使った舞台美術のオペラになりそうです、今年の夏からでも。

《<https://d-wokit.jp>》

このような会社は有名なダヴィデ・リヴェルモア (Davide

Livorno) という演出家も関わっているヴィデオ・デザイン
の会社なんです。彼はミラノのスカラ座のためにいろんな舞
台を作っているのですが、この会社はもちろんロックなどの
普通の歌手のコンサートもやっていますが、このようなオペ
ラとか、過去にローマで行われた公演『セヴィリアの理髪師』
などに、このような画像を使ってスクリーンに映して、これ
は『アイダ』ですね。これはスカラ座で上演された『アッ
ティラ』Attilaですね。

これからこのような流れ、ヴィデオデザイン、テクノ・ク
レアチヴィティ、エンターテインメント・デザインなどによ
る演出が流行るんじゃないかという気がいたします。

大体、本場のオペラの豊かな世界の中で、このような状況
の中でも、いろいろな発想、多彩な想像力を活かした工夫が
生まれてきたように思いますけれど、今度は人形劇ですね。
人形劇はあまり普通の生身の役者を使った劇よりも、気をつ
ければ感染しないような状況なので、やりやすい舞台です。
これは伝統のあるミラノのコッラ人形劇 Teatro Colla です。

《<https://www.facebook.com/watch/?v=887312145363610>》

大体オペラの作品を舞台にのせる人形劇ですが、糸あやつ
りですね。

糸あやつり人形遣いはマスクをすればそれで簡単にすみま
す。これは『アイータ』ですね。踊りの場面。

《<https://www.mymovies.it/film/2003/aidadellemarionette/>》
今年、これは昔からのレパートリーの作品として残って
いるものですが、人気作になっています。そして、今
年からはこのような人形劇が新しく制作になります。これ
は、ダンテの『神曲』を舞台にしたもの。今度は天国に上が
るときの場面ですね。お星さまが見えて。

《<https://www.youtube.com/watch?v=8wSpzh0w9ek>》
《<https://www.youtube.com/watch?v=bMjVxAT3gyg>》

もう一つ、シチリア島の方の伝統の人形劇をお見せした
と思います。これもコロナ禍でも割と簡単にできる上演で
す。いろんな人物をここでは紹介しているのですが、
そしてもう一つ『狂えるオルランド』の作品を舞台化したも
のです。

《<https://www.youtube.com/watch?v=pAYB3lh6Y6g>》
この人は人形使いの一人ですね。普通、シチリアの伝統的
なプーピポピの人形劇は、人形使いは人形を遣い、人物の
声を出しながら、姿を見せないんですけれど、ミットモ・ク
ティッキョ Mimmo Cuticchio という人形遣いは、自分の姿

を見せて新しい作品、新創作、独自の演出を色々生み出して
いる人なんです。

これは地獄めぐりの場面です。

《<https://www.youtube.com/watch?v=wsXD9vUkduo>》

これまで人形劇の例をいくつか挙げてきましたけれど、今
度はイタリアのパレエの伝統についてお話したいと思います
です。パレエの場合は、もちろんイタリアで生まれ、フランス
で発展してロシアで完成された舞踊芸術ですけれども、その
起源は間違いなくルネッサンス時代のイタリアにさかのぼ
り、貴族の館で開かれた宴会の余興から派生しましたが、宮
廷の有名な舞踊師匠によるヨーロッパ最古の舞踊論も残って
います。その後一六世紀にフィレンツェのメディチ家からフ
ランス王権に嫁いだカテリーナ（カトリーヌ・ド・メディシス）
によってフランスでも最初とされる宮廷パレエ『王妃のパレ
エ・コミック』を一五八一年に上演となりました。

でもイタリアの伝統はそれで止まったわけではなくて、や
はりその後もフィリップ・タリオーニ (Filippo Tagliani)とい
う演出家が出て、旅芸人ですね、まさにロマンチック・パレ
エの創始者で、その娘がマリー・タリオーニ (Marie
Tagliani)で『ラ・シルフィード』の主役を演じるバレリーナ

になります。そしてカルロッタ・グリージ (Carlotta Gris)、'エスメラルダ'『ジゼル』のバレリーナとして主人公をつとめる一人になります。それから、ファニー・チェツリート (Fanny Carrio) も『オンディーン』の主人公になるわけですが、みんなイタリアのバレリーナで、これは偶然ではないですね。

ピエリーナ・レニヤーニ (Pierina Legnani) もやはりロシア帝室バレエ団で「プリマ・バレリーナ・アッソルータ」の地位にあった人なんですけれども、『白鳥の湖』の主人公。そして、ジュゼッピーナ・ボツツァッキ (Giuseppina Bozzacchi) も、『コッペリア』の主人公を初演の時、演じた、一六歳のときです。それからヴィルジーニア・ズッキ (Virginia Zucchi) という人は、『ラ・フィユ・マル・ガルデ』の主役を初演の時演じたバレリーナです。アントニエッタ・デルレーラ (Antonietta Dell'Era) も初演の『くるみ割り人形』のヒロインでした。カルロッタ・ブリアンツァ (Carlotta Brianza) はチャイコフスキー作曲の『眠れる森の美女』のオーロラ姫役の初演者です。このようなバレリーナたちは、バレエの歴史の中でほとんど今でも演じられている名作の主役として、テクニクに優れて、新技法などをとり入れたとても大事な役割を果たしてきました。

また、バレリーノの中でもガエターノ・ヴェストリス (Gaetano Vestris) も一応イタリア出身で、その後モスクワ、フランスで育つ。ジャン・コラツリ (Jean Coralli) も実はイタリア系の人だったんですが、ということとは、アカデミック・バレエとしてフランスの王家のお抱えの宮廷バレエは栄えましたけれども、パリはあくまでもヨーロッパ中から集まる中心だったんですが、イタリアで育つた、それともイタリアからきたイタリア出身のバレリーナ、バレリーノがパリに行つて、そして他の国の舞台を回つて新創作・新しい技法を披露し、新しいエネルギーをもたらし、ロシアの劇場でも大事な役割を果たしてきました。

そしてカルロ・ブラシス (Carlo Blasis) やエンリコ・チェッティ (Enrico Cecchetti) のような振付家・指導者・著作家もいます。カルロ・ブラシスはやはりスカラ座の校長に就任した人なんです、エンリコ・チェッティはスカラ座のプリモバレリーノに昇進してから、色んな国で活躍して、ワルシャワのバレエ学校にも転任して、『火の鳥』の魔王のカステイ、『ペトルーシカ』の魔術師の役も演じて、バレエ・リュスとの関係もあったが、その前に、もちろんサンクトペテルブルクの演出のバレエ団とも深い関わりがあった、大変有名な人でした。

なお、エンリコ・チェケッティは世界初のバレエ理論書を出版したカルロ・ブラシスの孫弟子として自分なりのメソッドを作った人です。アグリッピナ・ワガノワは、その二人のメソッドに習って自分のメソッドを作っていました。日本の帝国劇場に招かれたイタリアの振付師ジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ローシー (Giovanni Vittorio Rossi) もやはりカルロ・ブラシスとエンリコ・チェケッティの系統に属するわけです。

さて、ちょうど今年にはスカラ座の戦後のいちばん有名なバレリーナ、カルラ・フラッチ (Carla Fracci) が亡くなってしまいました。彼女は庶民の出身で、お父さんは都電の運転手だったので、その運転手は音楽が好きで娘のスカラ座のバレエ学校に入らせて、スカラ座の前を通過度にベルを鳴らして娘を励ましていたと言われているのですが、彼女は国民的バレリーナになって世界の一番有名なダンサーたちと一緒に素晴らしい舞台をやってきた人ですね。『ジゼル』とか『ラ・シルフィード』は特に素晴らしかったですが、ここで、一応少しだけ、ロベルト・ボッレというバレリーノと一緒に踊った場面をお見せしたいと思います。

《<https://www.youtube.com/watch?v=pCLT08BvQ6Y&t=396s>》

《<https://www.youtube.com/watch?v=pCLT08BvQ6Y&t=331s>》

二人で東京で踊った時の画像です。彼は二二歳で、彼女は六二歳。それでも大変素晴らしい舞台を踊ってきましたけれども、これは『薔薇の精』ですね。今年フラッチさんが五月に亡くなりましたけども、一月に彼女は丁度スカラ座に来てマスタークラスをやりました。なくなる何ヶ月前ですけれども、スカラ座は幸いにもそのマスタークラスをオンラインで公開することになって、これからも伝承のためにバレエ団のマスタークラス、有名なバレリーナ、有名なバレリーノが指導するマスタークラスをみんなに見せるということが新しいシステムになりました。ロックダウンの中で、とてもいい対策だと思います。

《<https://www.youtube.com/watch?v=EmHyTBam0E&t=482s>》

これは『ジゼル』の、彼女が指導する場面です。イタリアのバレエの伝統には「技術だけで踊るのではなく、心で踊るのです」彼女とアレックスサンドラ・フェッリのジゼルなどは比類のないわけがそこにあるように思います。

オンラインでこのように生中継だけでなく録画したマスタークラスを見て聞くことができるので、これもコロナ禍の

時代の前にはあまりスカラ座にもおそらく他の劇場にもなかったようなことです。また、同じように、アレッサンドラ・フェッリ (Alessandra Fern) のマスタークラスも公開されました。

《<https://www.youtube.com/watch?v=uaHuDTfXmM>》

さて、次にセリフ劇に移りたいと思います。最後になりませんが。。。コンメディア・デッラルテもイタリア演劇の大事な財産として、レパートリーの中で残っているものがありますけれども、また、方言による地方の舞台にも多少その面影が窺えるように思います。ヴェネツィアではゴルドーニ (Carlo Goldoni) などの戯曲でも、ナポリでも戦後のエドゥアルド・デ・フィリップポ (Eduardo De Filippo) などの芝居にいたる長い伝統も残っています。

セリフ劇の場合は、オペラ劇場とは別に、イタリアの主要な都市に存在する常設劇場がたくさんあります。その中で、国の予算でも支えられている一七の常設劇場もあります。

ちょうど今年にはルイジ・ピランデッロ (Luigi Pirandello) の『作者を探す六人の登場人物』の一〇〇周年に当たります。

丁度一九二一年の五月九日に、ローマのヴァッレ劇場で上演されました。その作品が、大変スキヤンダラスで話題を呼ん

だ、騒ぎになってしまった初演だったんですけれども、「精神病院だー精神病院だー」と嘆き、騒ぐ人達が多かったようですが、その舞台は今年特別に同じヴァッレ劇場の中で演じられ、テレビでも放送されました。

《<https://www.youtube.com/watch?v=od9TUbl2lu4>》

これは六人の人物が登場する場面です。この場合も観客無しで、映画のような形で撮った舞台ですね。稽古をしている劇団のところに急に六人の登場人物が表れて、大変大胆で画期的な作品だと思います。これは娘の役ですね。皆喪服を着ています。舞台監督と俳優たちを説得して、自分たちのドラマを語り、自分たちの悲劇を完成し、上演してくれる新しい作者を探しているところ。

これはヴァッレ劇場ですね。とてもきれいな劇場でヴェルディの『マクベス』のオペラなどが初演されたところですね。

そしてもう一つ、同じピランデッロ、『お気に召すまま』(Cosi' e' (se vi pare) 『御意にまかす』という舞台なんですけれども、コロナ禍のためにこれも特別なやり方でこれからフィレンツェのラ・ペルゴラ劇場で上演されることになっています。ぜひお見せしたいと思います。

《<https://www.youtube.com/watch?v=VJBXeV4EH0>》

これはエリオ・ジェルマーノ (Elio Germano) という映画俳優ですけれども、この場合は最先端のヴァーチャルの技術を使って、観客は皆特別なメガネを掛けることによって舞台の中に入り込むような、自分も人物の一人になるような気分になります。この技術は確かに今の状況と、そしてピランテッロの『お気に召すまま』という戯曲にとっても適していると思います。映画でもない、演劇でもない、観客が特別な体験ができるような舞台ですよ、ということは今ジェルマーノさんが説明しているところです。

またセリフ劇、これはラ・ペルゴラ劇場、今度公演されるところでですね。このラペルゴラ劇場の中で、一九〇六年に、エレオノーラ・ドゥーセ (Eleonora Duse) という当時のヨーロッパの中で一番有名な女優の一人、とエドワード・ゴードン・クレイグとイザドラ・タンカンが力を合わせてイプセンの『ロスメルホルム』という作品を演じました。あれも画期的な作品だったんですが、エレオノーラ・ドゥーセとゴードン・クレイグとの衝突が色々ありましたようですが、とても不思議な舞台だったそうです。この舞台はとても興行きが深くて本舞台の一番奥に彼女の楽屋がその際特別に設けられて、今でも残っています。フィレンツェを見に行ったら、ぜひこの劇場もご覧になってください。エレオノーラ・ドゥー

セの楽屋も見られるので。

これはミラノのピッコロ劇場ですけれども、ジョルジョ・ストレーレル (Giorgio Strehler) が生誕一〇〇周年になるので、ここでもストレーレルを偲んだいろんな作品が演じられるようです。また、ちょうど今年はミルバ (Mira) という歌手が亡くなりましたので、彼女と一緒に作った舞台もたくさんあると思います。ストレーレルはコンメディアテラルルの作品(二人の主人を一度に持つアルレッキーノ)から、ゴルドーニ、モーツァルト、チェーホフ、モリエールなどまで、たくさん の古典のもののために全ての細部にまで配慮が行き届いた演出を作ってきた演劇人ですが、ミルバと共に特にベルトルト・ブレヒトの色んな作品に力を入れて、歴史に残るような印象的な公演になったと思います。

ここではイタリア語ですが、ミルバは英語ではなく、イタリアでイタリア語、フランスでフランス語、スペインなどでスペイン語、ドイツでもドイツ語でも歌った実力派の歌姫でしたが、ブレヒトもドイツ語で歌うこともあったのです。

《<https://www.youtube.com/watch?v=bvKqtlNSX9U>》

《<https://www.youtube.com/watch?v=33kN5TFkMjE>》

《<https://www.youtube.com/watch?v=lcYHfc0H8>》

最後に現代演劇になりますが、あまり時間がないので急ぎ足でいきます。

ビエンナーレはヴェネツィアでもちろん今年もやることになっていきます。世界の国々で名前まで真似された、一八九五年に始まり、イタリア人芸術家のみならず国外の美術家も引き、長い伝統を誇る現代美術の国際美術展です。一九三〇年から音楽部門、一九三二年から映画部門も生まれますね。世界で一番古い国際映画祭ですね。アメリカのアカデミー賞は国際映画祭ではないからですね。ヴェネツィアの映画祭で日本の映画も沢山紹介されました芸術的なレベルの高い有名な映画祭です。建築部門は美術部門と交互に一九八〇年からありますけれども、今年の建築部門のテーマは、「これからどのように一緒に生きるか」How will we live together? という端的に今年の重大なテーマを取り上げているわけですが、大変楽しみになると思います。演劇部門も一九三四年から開催されていますが、今年のテーマは憂鬱、隔離、自粛、死、劇場の沈黙、舞台の裏方とアーティストの寂しさを考えながら新しい文化のルネッサンスを夢見るBieです。

その他に、オペラの演出、セリフ劇の新しい演出、いろん

な実験を見てきましたけれども、今年の間、また、電話を使った劇、つまり自分の家からでも電話をして俳優が特別に詩や物語の朗読とか、セリフ劇を語り、演じてくれるような実験もありました。そして、ラジオドラマはまた流行するようになりました。それから、お出前劇というものが、頼めば俳優は自宅まで一つのホームメードの舞台を用意してくれるという、食事・お弁当ではなくて実際の舞台を用意してくれるというような実験なども、多種多様に色々ありました。

まとめると、コロナ禍の時代の主題は、生と死との関係をめぐるようなテーマとか、儀礼と生活というテーマとか、現実より現実感があるイベントとしての興行とか、そういういろんなテーマがありましたけれども、その中にはロメオ・カステルツチ (Romeo Castellucci) という有名なイタリアの今流行の最先端・最前線に活躍している演出家がありますけれども、彼もダンテの神曲の『地獄』と『天国』の作品を出しています。特にモーツアルトの音楽『レクイエム』、ワグナーのオペラなどに合わせて、現代アートと音楽を合わせたような大胆に奇抜な発想による舞台を作っているのです。彼の公演はとても刺激的ですが、事実、彼はストリーミング、つまり生中継、ライブの演劇、それとも録画したものは非難して

拒否しているという徹底した姿勢をとっている人です。そのため、今年あまり活躍しなかったのですが、やはり偶然というものは劇の一つの要素として必ず取り込む方針で、彼は全部間違ひなく全部完璧に予めパッケージ化された設定をするのではなくて、舞台上子どもを使ったり、それとも犬を使うことよつて偶然、予想もつかないような生き生きとした(劇的な)諸要素を取り込んで、一回一回の舞台がいつも変わつていくような仕掛けを用意し、自分でも説明できないような感覚と発想で、我々の固定した観念、予測、安心感を揺さぶるような演出の仕方を心がけています。

《<https://www.youtube.com/watch?v=ZrNNEAZTOY&t=140s>》

このコロナウイルスの流行つた時期の中で、とても大事になつてきましたのは、国の役割ですね。過去には医療関係の予算はヨーロッパ諸国ではほとんど削られてきましたけれども、それは過ちだった。削減・削減でエスカレートする一方でしたが、これからは医療関係だけでなく、医療のため、研究のため、そして経済の復旧のため、国の役割はとても大事になつてきました。そして医療の場合、日本の場合も、しっかりした国営の施設、病院などにも、もっと力を入れなければ

ばならないという実感が浮かんできました。

日本でも舞台の労働者の支援金などは多方面から請求されたいと思ひますけれど、イタリアの場合もそういう必要がありました。特に健康保険、医療援助などの必要な人達のために、飲料関係の業者、観光業その関係の労働者、その中で特にコンサート、舞台、映画などの労働者にとつても深刻な問題になりました。

もちろん昔もそういう問題はなかったわけではなく、舞台芸術労働者の年金、社会保険というものがありませんけれども、昔有名・裕福になつたオペラの作曲家ジュゼッペ・ヴェルディは、ミラノで年をとつて貧困な状態になつてしまつた人たちのために、特別に予算を出して趣のある綺麗な養老院を建設しました。彼はこの施設を「私が造つた最も美しい作品」と語つています。

昔からある問題ですが、去年・今年はとても深刻な問題になつて、そのためにローマでこのようなデモがありました。ぜひ見ていただきたいです。

《<https://www.youtube.com/watch?v=KDS8kZnqj1TO>》

皆自分の七つ道具を入れた箱・長持ち・トランクを持ってきて、みんな仮面をかぶつてローマのポポロ広場でデモをしました。「仕事をやらせてもらいたい」「年金と保障がほしい」

という、今までフリーランスとして働いてきたパフォーマンス関係の労働者のデモ。自分たちなりのこういう迫力があるデモになりました。最初は仕事できなかった日にちの数を数えて、トランクを叩き出して、この広場にはアーティストの教会があつて、アーティストが亡くなったときには必ずお葬式が行われるところなんですけれども、演者にとつてはとてつとて馴染みのある、一応関係があるようなところなんです。

最後にフィナーレとしてこれを見せたい、聴いていただきたいと思えます。ロッシーニの『モーセとファラオ』の合唱です。これはスカラ座で、一九四六年ミラノが空襲によつて崩壊されて、色々やられて、戦後になつてスカラ座も色々傷んで立て直した後のコンサート。その時はファシズムに立派に反抗していたカリスマ指揮者トスカニーニは、アメリカから戻つてこのようなコンサートをしました。日本の新劇の劇団は一九四〇年にアントン・チェーホフの『桜の園』を演じたのですけれど、ミラノではこのコンサートをやりました。劇場の中だけでなく、外にも拡声器・スピーカーがあつて、一般の市民にも聞こえるようにしたのですが、それを聞きながら泣いた人たちが大勢いたそうですが、エジプトを脱出して解放されるヘブライ人達の、神様への祈りです。

オペラ歌手も皆貫禄のある戦前からの大巨匠ですが、レナータ・テバルデイという有名なソプラノ歌手がこのコンサートで初めてデビューして、トスカニーニに天使の声と呼ばれて絶賛されました。とても歴史的画期的な出来事だったと言えます。オペラ文化の再開ですね。ぜひ時間があつたら全部聴いてください。

《<https://www.youtube.com/watch?v=eFUK4koh0qk&list=PL35s>》

そして今年のスカラ座はそれにちなんだような感じですけども、今度はロッシーニの『グリエルモ・テル』のフィナーレの合唱を選びました。嵐は静まり、(スイスの、世界の)空気が綺麗になり、澄みきった空気の中にアルプスの山々が朝日に映えて美しく浮き上がっている。人々は再び取り戻した自由を賛美する。

《<https://www.youtube.com/watch?v=z9CTQsy2104>》

このように悲しみ多い大変な一年半以上だったんですけども、そのような数々の舞台のおかげで、涙と共に、心が広がるような、希望も湧くような気持ちになりました。

演劇人も皆様も、嵐の中のツバメのように、低く飛ばなければいけなかったんですが、これからは空高く飛べるように

したいと思えます。

ご清聴、ありがとうございました。

執筆者一覽(五〇音順)

川野真樹子(明治大学助手)

熊谷 知子(明治大学兼任講師)

小菅 隼人(慶應義塾大学教授)

佐藤真知子(お茶の水女子大学グローバルリーダークラスシップ研究所)

研究協力員)

澤井万七美(国立沖縄工業高等専門学校准教授)

谷川 道子(東京外国語大学名誉教授)

寺尾 恵仁(北星学園大学専任講師)

藤岡阿由未(相山女学園大学教授)

細川久美子(近世演劇・浄瑠璃研究)

正木 喜勝(阪急文化財団学芸員)

松田智穂子(専修大学准教授)

村井 華代(共立女子大学教授)

演劇学論集 日本演劇学会紀要73

二〇二一年二月一五日 発行 [非売品]

編集

日本演劇学会
紀要編集委員会

日本演劇学会会長

発行者

永田 靖

制作

三美印刷株式会社

発行所

日本演劇学会

〔事務局〕

〒一〇一―八三〇―一

東京都千代田区神田駿河台一―一

明治大学文学部文学科演劇学専攻内

TEL 〇三―三二九六―四五四五(代)

FAX 〇三―三二九六―二三五〇

メールアドレス fc03200@nifty.ne.jp

学術刊行物指定(昭和41年12月20日 郵政省告示第1100号)